

古今著聞集 能は歌詠み

主題

初秋の頃、花園の左大臣が、「能は歌詠み」と自ら言う新参の侍に、「はたおり」の歌を求めたところ、侍は、「青柳の」と詠み出した。その初句を聞いた女房たちは、季節はずれの歌材であると笑い出したが、左大臣はそれをたしなめる。最後まで聞くと、見事に歌はまとまっております、左大臣は褒美を与えた。同じようなことは、寛平の歌合で紀友則が歌を詠んだ際にもあった。

POINT

①新参の侍が「能は歌詠み」と書いた気持ち、また、侍の言動に対する女房や大臣の対応と心情を考える。

②説話の中で紹介された二首の共通点を読み取る。

③文法では、特に「なり」の分別をマスターする。

※ノートの取り方について

このデータは、あくまで板書の想定です。**本文（予習段階）**・**現代語訳（予習＋授業内）**は全て記載されている必要があります。

その他の情報（黒板やスライド書き込み）については、自分の必要に応じて加減をしてください。全て写した方が提出点があがるという訳ではありません。むしろ取捨選択と自分だけの情報追加をした方が理解が深まります。

ただし、**授業内**で「絶対書いておくべき指示」をした箇所はチェックします。

◎新参の侍の歌

春 青柳のみどりの糸を繰りおきて…

予想外の詠み出し

夏へて

秋ははたおりぞ鳴く…歌題での結び

〈機知に富む〉

◎友則の歌

春霞…

予想外の詠み出し

かすみていにし…過去

かりがねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に…歌題での結び

新参の侍の歌

「同じことによ。」

季節の移り変わりをふまえ、
た、機知に富む巧みな歌

◎主題…新参の侍の功名譚

『十訓抄』類話の主題

◎主題…意外性のある詠み出しの否定や非難悪

□は慎むべき↓教訓性

段落分割

第一段 始め P10・L2 **新参の侍の紹介**

花園の左大臣家に初出仕した侍が「名簿」に「特技は歌詠み」と書いた。

第二段 P11・L3 **新参の侍の機知に富む歌。**

秋の宵、大臣に「はたおり」の歌を所望された侍は、初句に春の景物を用い、二句以下で季節の推移を詠み、見事な秋の歌にまとめあげ、大臣を感動させた。

第三段 終わり **友則の歌と、編者の評。**

寛平の歌合における紀友則の歌と新参の侍の歌とは、詠みぶりの点において「同じことによ。」と説話編者が評する。

花園の左大臣の家

に、初めて参りたりけ

る侍の、名簿の端書き

に、「能は歌詠み」と

書きたりけり。

大臣、秋の初めに、

南殿に出でて、はたお

りの鳴くを愛しておは

しましけるに、

暮れければ、
「下格子

に、人参れ。
」と仰せ

られけるに、
「蔵人の

五位違ひて、
人も候は

ぬ。
」と申して、この

侍参りたるに、
「た

だ、さらば、
なんぢ下

ろせ。
」と仰せられけ

れば、
参りたるに、

に、「なんぢは歌詠み

な。「とありければ、

かしこまりて、御格子

下ろしさして候ふに、

「このはたおりを**ば**聞

く**や**。一首つかうまつ

れ。「と仰せられけれ

ば、「青柳の」と、初

めの句を

申し出だしたるを、候

ひける女房たち、折に

合はずと思ひたりげに

て、笑ひ出だしたりけ

れば、「ものを聞き果

てずして笑ふやうやあ

る。」と仰せられて、

「疾くつかうまつ

れ。」とありければ、

青柳の^のみどりの^の糸を

繰りおきて夏へて秋は

はたおりぞ^ぞ鳴く

と詠みたりければ、大

臣、感じ給ひて、萩織

りたる御直垂を、押し

出だして賜はせけり。

寛平の歌合に、「初

雁」を、友則、

春霞かすみみていにし

かりがねは今ぞ鳴くな

る秋霧の上に

と詠める、左方にてあ

りけるに、五文字を詠

みたりける時、右方の

人、声々に笑ひけり。

さて次の句に、「かす
みていにし」と言ひけ
るにこそ、音もせずな
りにけれ。同じことに
や。

【巻第五】